

## ナガラ原東貝塚出土のスセン當式類似土器について

新里貴之  
鹿児島大学埋蔵文化財調査センター

SHINZATO Takayuki  
Research Center for Archaeology,  
Kagoshima University

### はじめに

スセン當式土器は、奄美大島郡知名町スセン當貝塚出土土器を標式とする（上村・本田1984）、奄美諸島の古墳時代並行期を代表する土器である。

筆者はかつて、型式設定されながら内容が不明瞭なスセン當貝塚出土土器を、当時の鹿児島大学所蔵資料のうち、行方不明となった土器を除き、図化可能な全てを再検討した経緯がある（新里2000）。小破片まで検討したのは、スセン當貝塚出土土器群が中空脚台甕単純様相を示すのか、沖縄のようにくびれ平底や尖底が混在する状況を示すのか判断する意味があった。この資料の大半は現在、鹿児島国際大学に保管されているが、一部は鹿児島大学埋蔵文化財調査センターにも保管されている<sup>(1)</sup>。近年、奄美・沖縄諸島で同種の資料が、徐々にではあるが出土し始め、ようやくその様相が明らかになり始めている。

本報告書であるナガラ原東貝塚においては、第3次調査第IV層（新里ほか2001；報告書第8図34）、第8次調査第V層（柴田ほか2012；報告書第14図25）で、スセン當式土器に類似する土器が出土している。沖縄諸島では、当該期の貼付文土器の位置づけが不明な部分が多いので、今回、奄美諸島のスセン當式土器の再編年を行ない、ナガラ原東貝塚出土土器の型式学的な位置づけを検討する。

### 1. 研究略史補遺

筆者は、かつて大島郡知名町スセン當貝塚の発掘調査（上村・本田1984）から、研究が開始されたと捉えていたが（新里2000）、第二次世界大戦前、喜念貝塚（三宅・藤岡1940）でスセン當式土器らしき資料が注目されていたことをうかつにも見逃していた。猛省し、ここで補遺として紹介し、その後の研究も含め、略史を簡条書きしておく。

- ・1940（昭和15）年：伊仙町喜念貝塚（徳之島）において初の確認（三宅・藤岡1940）（図2-20）

壺、焼成不良、胎土に石英粒を含む。胴部最大径の上・下に施文、貼付文（波状隆起線文+円形浮文）

<sup>(2)</sup>。これまでの土器文様構成と趣を異にするものとして注意を促す

- ・1984（昭和59）年：知名町スセン當貝塚発掘調査概報（上村・本田1984）（図2-1～19）

1) 「口縁部はやや外反し、口縁部に横位に、または縦位に、三角あるいは平べったい凸帯をはりつけた土器で、（中略）底部はあげ底で（中略）器形は甕または鉢形土器と推定され（中略）5世紀代（古墳時代相当期）のものである」

2) 型式学的には、兼久式土器の文様要素、そして底部は南部九州の成川式土器の要素を併せ持っている

- ・1984（昭和59）年：池畑耕一による南西諸島の弥生時代並行期以降の編年（池畑1984）

スセン當式土器を古墳時代～奈良時代頃に位置づける（8段階中7段階目）

- ・1988（昭和62）年：里山勇廣によるウギヤウ遺跡資料の位置づけ（図2-23）

- 兼久式と近縁で先行する要素もあるが、スセン當式土器よりも古式とする
- ・1997（平成9）年：笠利町用見崎遺跡の発掘調査（熊本大学文学部考古学研究室；若杉ほか1997）  
初めて層位的にスセン當式土器⇒兼久式土器の序列が確認される
  - ・1998（平成10）年：高梨修によるスセン當式土器の再検討（高梨1998）  
「突帯文・沈線文土器群」として一括し、層位的に兼久式土器に先行するとする
  - ・1999（平成11）年：高梨修によるスセン當式土器の再検討（高梨1999・2005）  
スセン當式土器を古墳時代前半段階として位置づける
  - ・2000（平成12）年：新里貴之によるスセン當貝塚出土土器の再検討（新里2000）  
スセン當貝塚出土土器の全資料化（除・行方不明分）、甕の分類・編年、器種組成等に言及
  - ・2001（平成13）年：名護市大堂原貝塚の発掘調査・名護市教育委員会（琉球新報2001）  
奄美・沖縄諸島を含め、スセン當式土器甕の初の全形資料の出土
  - ・2011（平成23）年：和泊町西原海岸遺跡の発掘調査概報（北野・森2011）（図2-24～30）  
スセン當式土器の好資料の多量出土（和泊町教育委員会より今年度刊行予定）

## 2. スセン當式土器の分類

現在、貼付文を有するスセン當式土器の出土遺跡は管見の限り、奄美諸島で17遺跡、沖縄諸島で16遺跡、計33遺跡が確認される（表1・図1）。奄美諸島ではスセン當式土器が単独で出土する遺跡がある一方で、沖縄諸島では、在地の大当原式土器（無文尖底系土器群）やアカジャンガー式土器（くびれ平底系土器群）とともに少量出土することが多い。また、在地の土器と明らかに胎土が異なる搬入品らしきものも混じっている。このことから、スセン當式類似土器が、沖縄諸島の同時期の在地土器のなかで客体的な存在であることを示している。

筆者は、奄美の弥生時代並行期の土器から古墳時代並行期のスセン當式土器までを、大略「沈線文脚台系土器群」としてまとめている（新里2008）。弥生時代並行期の沈線文主体土器からの流れを汲むスセン當式土器というこの考えは現在も変わってはいないが、スセン當式土器の沈線文土器は、器

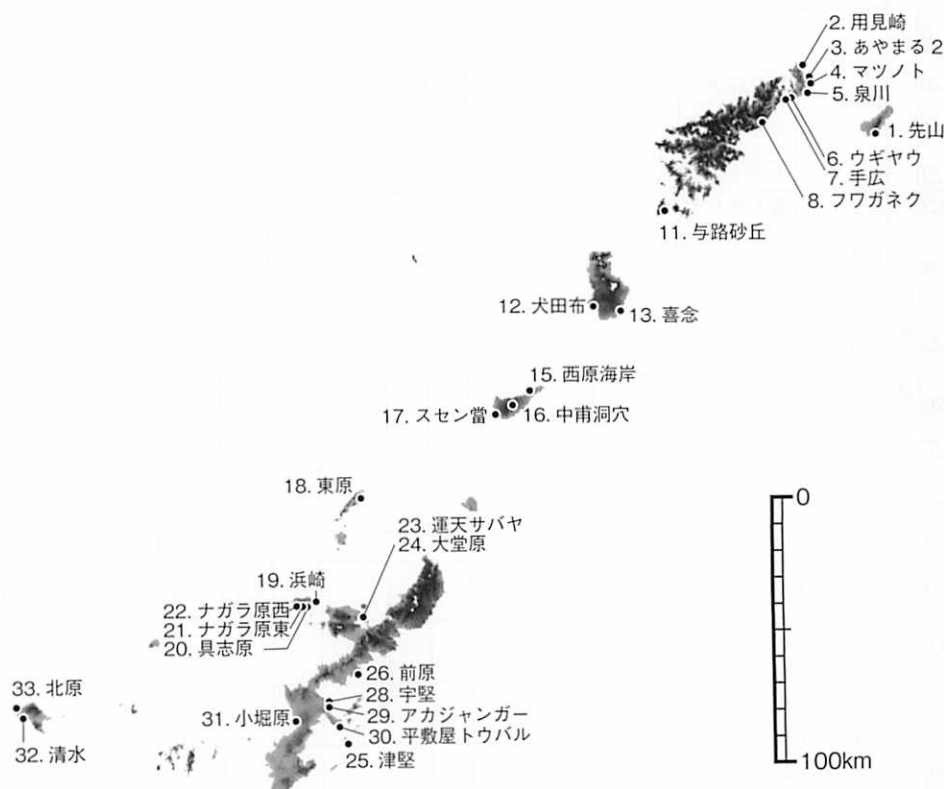


図1 スセン當式土器・類似土器の分布（S=1/400万）  
国土地理院「数値地図50mメッシュ（標高）」を用い、カシミール3Dにて作成

形・文様構成などが分かる資料が、これまでフワガネク遺跡を除いてほとんどないのが現状であり、比較検討が難しい。貼付文土器は資料が多いものの、西原海岸遺跡を除いて、器形・文様構成に詳細に言及できるほどの資料が揃っているわけではない。この点、壺も同様である。このため、現状では

表1 スセン當式土器（貼付文土器群）出土状況

番号	島嶼	島名	遺跡名	段階Ⅰ				段階Ⅱ a			段階Ⅱ b		段階Ⅲ	壺A	壺B	脚台	その他	出土状況	文献	
				I + 沈線	I a	I b	I c	II	III	I・II										
1	奄美	喜界	先山 9TR		△												層	戸崎・長野 1987		
2			用見崎						○									XVI層	若杉ほか 1997	
3			あやまる第2 2T						△	△							兼久式	層	池畑ほか 1984	
4			マツノト										△			○	兼久式	2文化層	中山 2006	
5			万屋泉川	△														表採	中山 1983	
6			ウギヤウ							△								表採	里山 1988	
7			手広 84			○										○	仲原式, 兼久式	3文化層	里山ほか 1984	
8			手広 84											△		△	兼久式, 土版	1文化層	里山ほか 1984	
9			フワガネク 24			○										△	△	Vb層	高梨 2003	
10			大浜			○						△						兼久式	表採	高梨 1999
11	諸島	与路	笠利町内	△									△		△	弥生系, 兼久式 カムイヤキ	表採	長野ほか 1991		
12			与路砂丘		△													表採	河口 1956	
13	徳之島	徳之島	犬田布		△				△							面縄西洞式, 犬 田布式	表採	吉永ほか 1984		
14			喜念											△		嘉徳Ⅰa・Ⅱ式, 宇宿上層式	層	三宅・藤岡 1940		
15			岡前戸ノ木		△													表採	上村 1984	
16	沖永良部	沖永良部	西原海岸	△※	◎	○							◎		◎		3b層	北野・森 2011		
17			中甫洞穴		△				△					△?	△	兼久式	2・3層	河口・本田 1985		
18	沖繩	伊平屋	スセン當		◎				◎	△				△	◎		V層主体	上村・本田 1984		
19			東原 86									○			△	弥生系, 尖底, くびれ平底	3層主体	金城 1986		
20			東原 90									◎				尖底, くびれ平底	II層主体	盛本 1990		
21			浜崎		△											尖底, アカジャ ンガー式	III層主 体	大城 1980		
22			具志原 85		○				○		○				△	大当原式	II~IX層	安里ほか 1985		
23			ナガラ原東		△				△						○	大当原式, アカ ジャンガー式	IV・V層	柴田ほか 2012		
24			ナガラ原西		○	△			○	○	○				○	大当原式	III~VII層	安里・名嘉真 1979		
25			運天サバヤ										△					表採	多和田 1956	
26			屋我地	屋我地	大堂原		○				○						○	阿波連浦下層 式~アカジャ ンガー式	層	名護市教委
27					津堅	△						○							大当原式, アカ ジャンガー式	IV~VI層
28	諸島	沖繩	前原		○	○							○			大当原式~アカ ジャンガー式	6層主体	田里ほか 2005		
29			松田ヒッピー浜												△		表採	宜野座村博		
30			宇堅		△										△	阿波連浦下層 式~大当原式	第1shell mound	金武ほか 1980		
31			アカジャンガー		△				△					△		大当原式	I~V層	金武ほか 1980		
32			平敷屋トウバル		○									○	○	大当原式, く びれ平底	IV層	鳥袋ほか 1996		
33			小掘原		△										△	大当原式, く びれ平底	IV層	東門ほか 2009		
34	久米	久米	清水		△				○					○	○	大当原式, く びれ平底	IV~VII層	盛本ほか 1989		
35			北原												△	尖底, くびれ 平底	III層	盛本ほか 1995		

△：少 ○：一定量 ◎：多 奄美諸島の脚台のみ出土遺跡は除く ※ミミズ腫れ突帯のみ  
番号は図1に対応 ■は編年に有効と考えられる出土状況

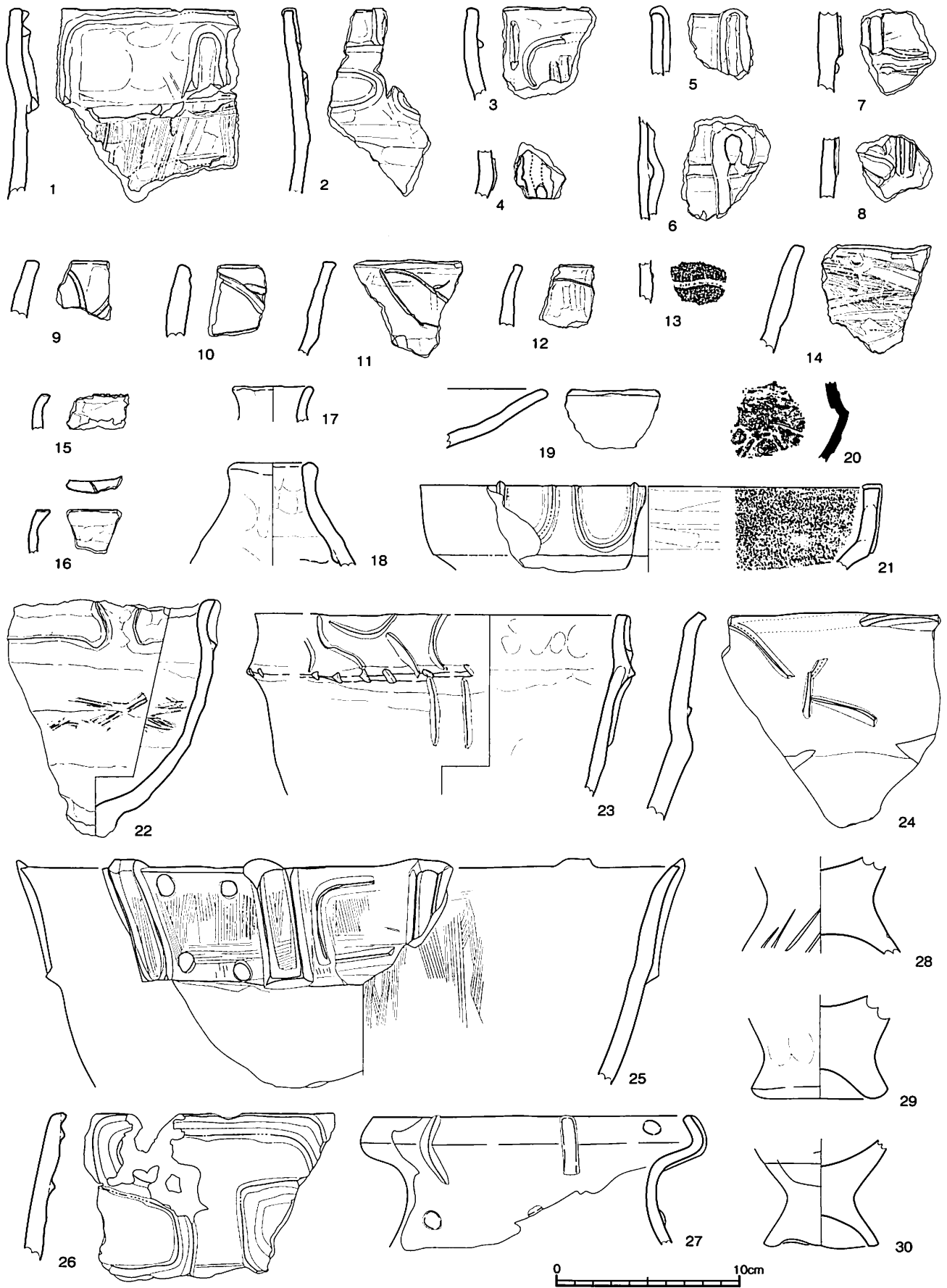


図2 奄美諸島出土スセン甕式土器 (S=1/3)

第II部

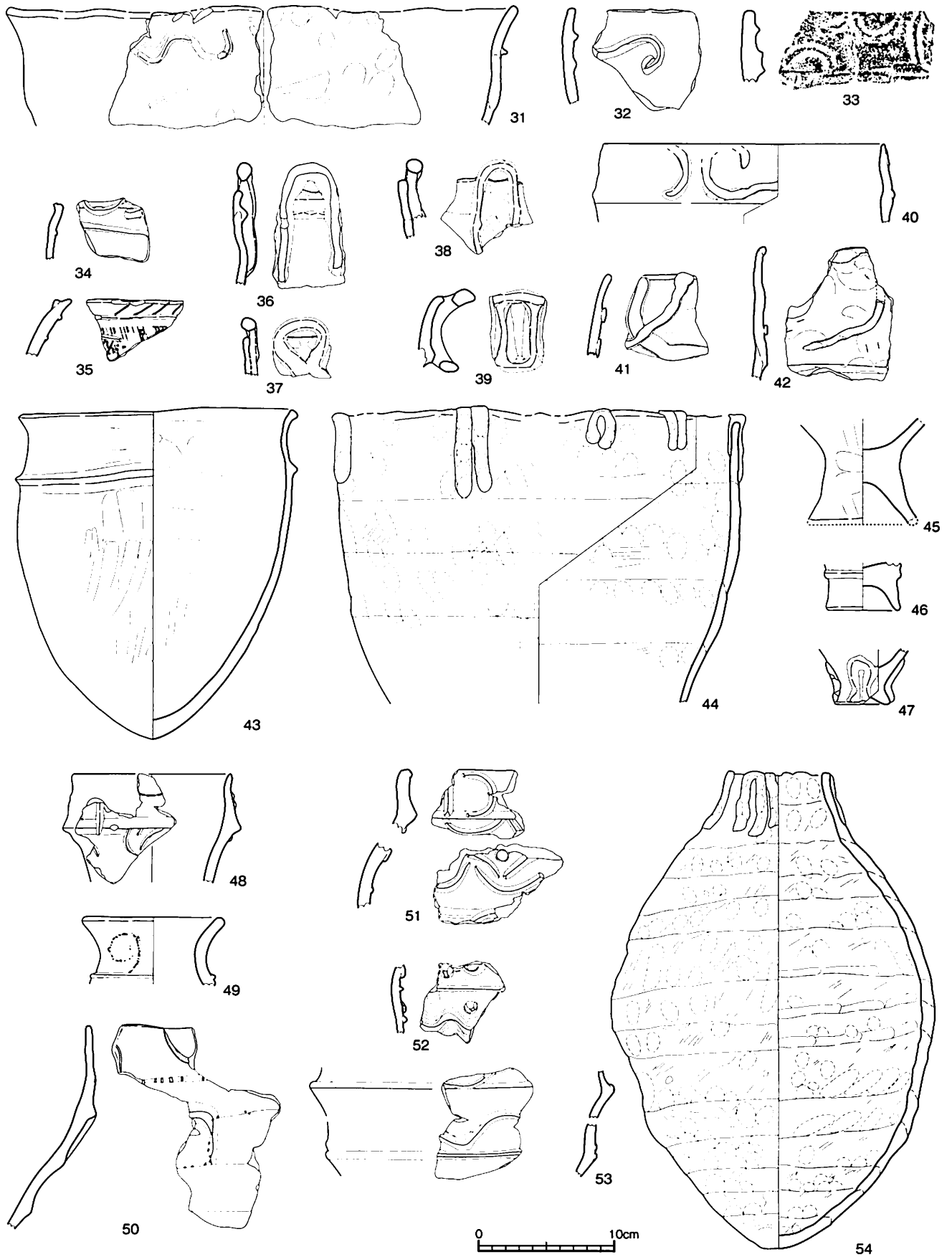


図3 沖縄諸島出土スセン甞式土器・スセン甞式類似土器（貼付文）（S=1/4）

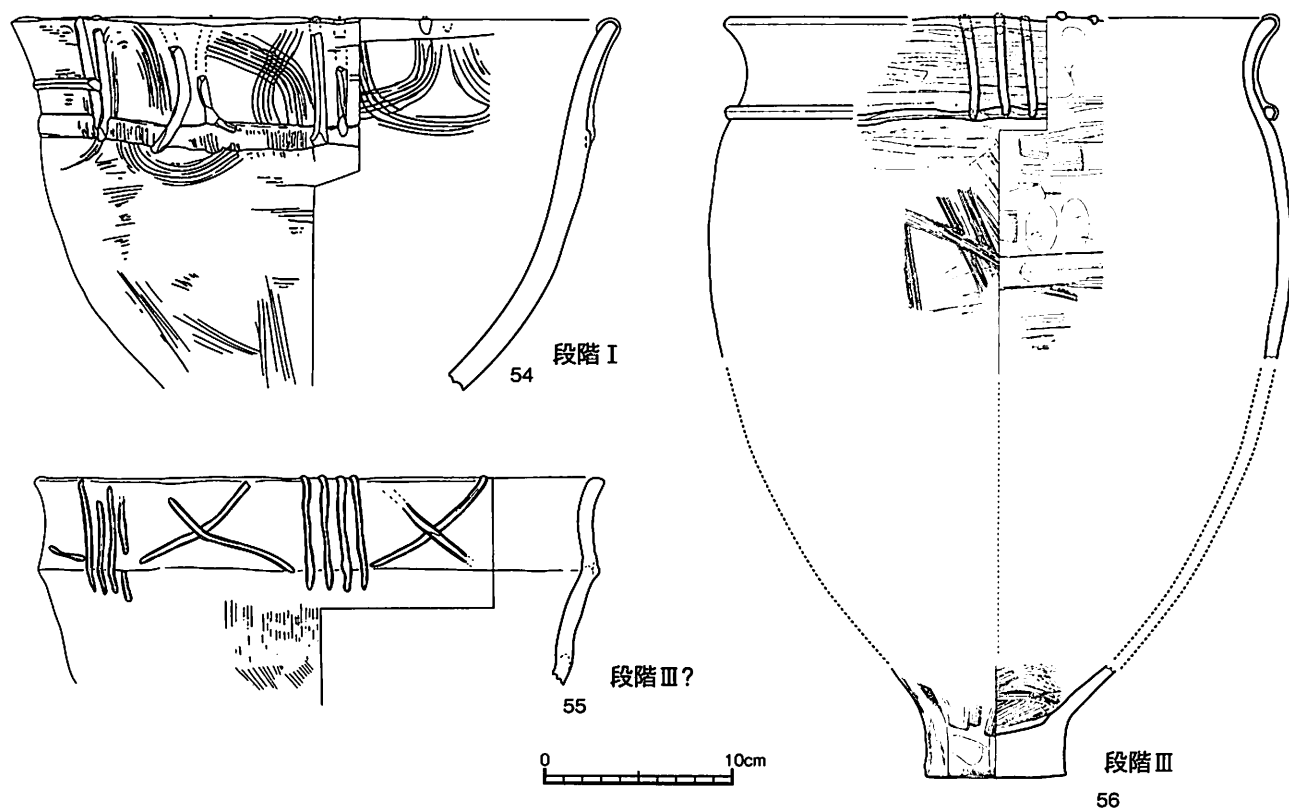


図4 段階Ⅰ・Ⅲの土器 (S=1/4) 54は縮尺不同

前回検討と同様、新里2000文様要素分類に準拠し、分類項目を一部追加して、貼付文土器の分類から大まかな先後関係を検討したい。

### 2.1. スセン當式甕の分類

スセン當式甕を、スセン當貝塚出土土器をもとに、文様要素を主として以下9類に分類する。

I a類：三角突帯およびミミズ腫れ状突帯 (図2-1~4)

I b類：三角突帯およびミミズ腫れ状突帯+円形浮文 (図2-25)

I c類：三角突帯およびミミズ腫れ状突帯+刻目突帯 (図2-23)

Ⅱ類：突帯文の突出部を押しつぶしたようなやや幅の狭い平坦な突帯 (図2-5)

Ⅲ類：平坦な幅広突帯、あるいはそれに三角突帯あるいはミミズ腫れ状突帯または沈線文を組み合わせるもの (図2-6~8)

Ⅳ類：沈線文。幅広の工具で施文され、総じて浅い (図2-9・10)

Ⅴ類：沈線文。Ⅳ類よりはやや幅が狭い (図2-11)

Ⅵ類：沈線文。極細の沈線文。浅いものと深いものがある (図2-12)

Ⅶ類：刻目突帯文+沈線文 (図2-13)

Ⅷ類：無文 (口縁部のみ)。ただし、有文土器の無文部分の可能性もある (図2-14)

Ⅸ類：口唇部に刻目を施すもの、口唇部に沈線文を施すものを総称する (図2-15・16)

### 2.2. 壺の分類

壺A類：袋状口縁壺 (図2-20・27)

壺B類：直状口縁壺 (図2-17・18)

以上のうち、貼付文である甕I a~I b類・Ⅱ類・Ⅲ類、壺A・Bを検討対象としたい。

### 3. 沖縄諸島スセン當式類似土器出土の意義

#### 3.1 奄美諸島スセン當式土器の編年

奄美諸島弥生系土器からの型式学的な変遷を検討すると（図5）、弥生系土器は、南九州系弥生土器の形態を取り入れ、弥生時代中期後半並行まではほぼ同様の形態の変遷を遂げる（i・ii）。弥生時代中期末並行ごろから地域的な変化が生じ、南九州系弥生土器にない器形がみられるようになる（iii）。ただし、口縁部内面屈曲部の突出した稜線は明瞭で、弥生土器の名残が看取される。スセン當式段階前後からこの稜線は消え、緩やかな口縁部形態を示すか（iv）、窪んだ凹部を形成する（v・vi）。また、文様要素と施文部位の型式学的方向性からは、弥生系土器にもある甕Ⅰ類文様（iii）が最も古く位置づけられ、弥生系土器の口縁部上面文様が、口縁部形状が時間とともに立ち上がってくるにつれ、口縁部内外面施文となる方向性からは（i→ii→iii）、口縁部の内外面に施文されるのが最も弥生系土器に近いと判断される（iv）。ちなみに、これは南九州系弥生土器・成川式土器にはみられない施文部位であり、奄美弥生系土器の地域性として捉えられる。やがて、典型的なスセン當式土器として盛行する段階では、口縁部内面の施文部位はほぼ消失する（v・vi）。

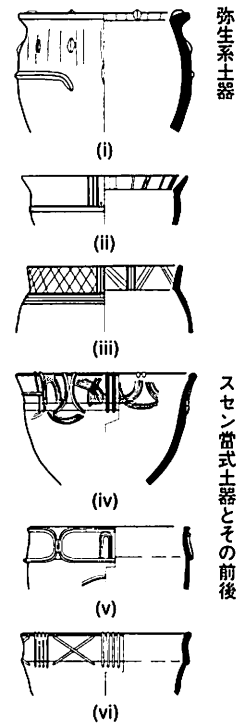


図5 型式変化模式図

表1からみると、奄美諸島では、甕Ⅰa類に細沈線文を口縁部内外面に施す資料がみられ（万屋泉川遺跡：図4-54）、西原海岸遺跡のように甕Ⅰa・Ⅰb類と壺Aが伴う例（図2-24～27）、そしてスセン當貝塚のように、甕Ⅰ～Ⅲ類と壺Bが伴う例がみられることが分かる（図2-1～8・17・18）。この段階には、その他の皿状の浅い器種などが伴うことがある（図2-19）。また、甕Ⅰ～Ⅲ類に類似した口縁部形態ではあるが、文様が直線的で（図4-55）、沖縄諸島の類例（図4-56）からはくびれ平底になる可能性がある資料も認められる。

以上のことから、スセン當式土器前後を大きく三段階に分け（表2）、段階Ⅰを口縁部形状が緩やかとなり、口縁部内外面に施文する段階、段階Ⅱを甕Ⅰ文様のみで構成され、壺Aがこれに伴う段階（a）と、甕Ⅱ～Ⅲ類文様が出現し、壺Bが伴うほか、その他の器種も認められる段階（b）に細分する。そして、再びⅠ・Ⅱ類文様のみとなり、底部がくびれ平底になると考えられる段階を段階Ⅲとする。甕の文様要素からすれば、文様要素が多様化し、やがて簡素化する型式学的方向性となる。これは新里2000分類で行なったA～C類のうち、B類を2段階に分けたものになる。

#### 3.2 ナガラ原東貝塚出土土器および沖縄諸島のスセン當式類似土器の位置づけ

ここであらためてナガラ原東貝塚資料を観察する。本書図66の3-34は、外面に刷毛目様調整を右上がりの斜位に施し、内面は指頭圧痕が著しい胴部片であり、その一部に奄美スセン當式甕Ⅰa類の文

表2 分類・編年試案

時期	施文部位		甕分類（貼付文）	甕主要底部形態		壺		他の器種	新里2000分類
	外面	内面		奄美	沖縄	袋状口縁A	直状口縁B		
段階Ⅰ	●	●	I類（+細沈線文）	（脚台）	尖底	？			A類
段階Ⅱa	●		I類	脚台	尖底	●			B類
段階Ⅱb	●		I～Ⅲ類	脚台	尖底		●	●	B類
段階Ⅲ	●		I類	くびれ平底？	くびれ平底		？		C類

様が貼付されるものである。第8次調査V層資料を観察すると(図3-42)、幅の狭い平坦な貼付文を有し、口縁部帯を意識したつくりはスセン當式土器の特徴に類似するが、口唇部が面取りされない点や、刷毛目様調整がみられずかわりに指頭圧痕が著しい点、薄づくりの点において、沖縄諸島在地の大当原式土器にみられる貼付文土器の一種であると考えられる(図3-31・32・36~41)。以上の2点の出土から、ナガラ原東貝塚のIV・V層のある段階は、奄美諸島スセン當式土器の編年の段階II bに並行するものであると結論づけられる。

そのほかにも沖縄諸島では、口唇部を面取りして平坦化しない(図3-42)、文様帯があまり意識されず緩やかな形状(図3-31・44)、あるいは逆に、在地の尖底甕に口縁部帯屈曲部を形成するものなど<sup>(3)</sup>(図3-43)、スセン當式土器の属性を部分的に取り入れた事例は多々ある。器形としては、完形復元される名護市大堂原貝塚例からみて、中空脚台まで取り入れている可能性もある。壺(48~53)や小型甕(46・47)はキメ細かい胎土や明るい色調からみて搬入品と思われるものが多いが、甕についてはナガラ原東貝塚出土土器のように、口唇部形態や口縁部帯の形成、調整などの細かな部分では相違しており、文様要素を主体とした受容が行なわれている。これは、沖縄諸島集団が、当該期の在地土器である大当原式土器に、スセン當式甕の文様要素を取り入れたものと捉えることができる。

### 3.3 沖縄諸島におけるスセン當式土器研究の意義

貝塚時代後期前半(弥生時代~古墳時代並行期)、ヤマトと琉球列島とで南海産貝交易が行われていたことが実証されている(木下1996;初出は1989)。この時期、弥生時代中期前半から中・南九州系弥生土器(甕・壺)や奄美諸島の弥生系土器(甕)が沖縄諸島にもたらされている。弥生時代中期後半からは、奄美諸島の弥生系土器(甕)が主体となり、南九州弥生土器は甕がほとんどみられなくなり、ほぼ壺のみの搬入となる。筆者はこれを弥生時代並行期の貝交易における奄美諸島集団の積極的な中継交易活動介入の証拠のひとつであると考えている(新里2004・2009)。古墳時代になると南九州古墳時代成川式土器の琉球列島への搬入は極めて少ないものになることと同時に(近年、徐々に類例が増えている;本書第II部 中村直子論考参照)、今回の検討で判明したように、奄美スセン當式土器の搬入や類似土器が沖縄諸島に予想以上にもたらされていることから、古墳時代並行期にあつては、消費地であるヤマトと供給地である沖縄諸島との結びつきは、ほぼ奄美諸島集団の中継的動きに限定されつつあり、また、本稿で検討したように、沖縄諸島において、スセン當式土器の搬入品や在地土器属性中にスセン當式土器の属性要素が取り込まれている背景には、奄美諸島集団との交易による結びつきは決して小さいものではなかったことを予想させる。土器からも奄美集団の交易活動に言及できる可能性は大きく、中距離的な交易に対応する在地集団の文化受容の証拠を提示できるひとつの方法は、奄美スセン當式土器の研究であろう。今後、さらに資料を精査し、再検討したい。

また、今回、スセン當式類似土器の出土したナガラ原東貝塚IV・V層の放射性炭素年代は、5世紀~6世紀なかば頃の値となっている(本報告書第I部第6章<sup>14</sup>C試料を参照)。スセン當式類似土器の暦年代が付与された最初の例であり、並行関係から奄美諸島スセン當式土器の暦年代へ迫れる意義は大きい。

## 4. まとめ

スセン當式土器は、戦前よりその存在が知られていたものの、近年まではほとんど不明確な土器であったが、用見崎遺跡(若杉ほか1997)・フワガネク遺跡(2003)の層位的出土によって、スセン當式土器⇒兼久式土器の序列は確実となり、古墳時代並行期の土器として注目されるようになってきた。また、屋鈍遺跡(西園2009)の弥生系土器⇒間層⇒兼久式土器の層位的出土も、間層にスセン當式土



## 第Ⅱ部

器の段階が位置づけられると考えれば、スセン當式土器が奄美諸島で一段階を担う傍証のひとつと捉えることも可能であろう。

本稿では、奄美スセン當式土器を、

- 1) 施文部位・文様要素・底部形態・器種組成から、四段階に再編年し、
- 2) 段階Ⅱでは、文様Ⅰ類+袋状口縁壺A(西原海岸遺跡)⇒文様Ⅰ～Ⅲ類+ナデ肩壺B(スセン當貝塚)の先後関係の可能性を指摘し、
- 3) ナガラ原東貝塚出土のスセン當式類似土器は、その文様要素からⅡb段階のものとした。
- 4) また、奄美諸島を中心に分布し、沖縄諸島に客体的に出土することから、前段階の弥生時代並行期の土器の動きと比較し、
- 5) 中・南九州系土器は、古墳時代には沖縄諸島に搬入されなくなり、代わりに奄美諸島のスセン當式土器が搬入されるようになる。古墳時代貝交易の奄美仲介者集団の積極的な動きをあらわす証左として注目すべきである。
- 6) ナガラ原東貝塚では、Ⅳ・Ⅴ層の放射性炭素年代が測定されている。スセン當式類似土器の理化学年代としては初のものであり、沖縄のスセン當式類似土器と奄美スセン當式土器の並行関係が型式学的にたどれるなら、その年代観に迫れる。

とし、今後の南海産貝交易活動の研究にもたらす意義は大きいと考える。

### おわりに

奄美諸島のスセン當式土器は、沖縄諸島の大当原式土器にも少なからず影響を残した土器であり、その背景には南海産貝交易の動きがあると考えられる。

しかしながら、本稿で筆者が検討した貼付文土器も、文様要素で検討したものに過ぎず、本来は器形、施文部位、文様構成・モチーフの関連で検討すべきものである。沈線文系土器の検討は未だ行なわれておらず、兼久式土器との型式学的連続性も課題として残されたままとなっている。

大島郡和泊町西原海岸遺跡調査報告書の刊行で、土器だけでなく、その文化内容の研究も大きく変わってくるものと期待される。いずれ稿を改めて検討したい。

和泊町教育委員会の北野堪重郎氏には、西原海岸遺跡データの使用をご快諾いただいた。また、常に沖永良部島の調査状況をご教示いただいている知名町教育委員会の森田太樹氏、沖縄大堂原貝塚データのご教示をいただいた名護市教育委員会の宮城弘樹氏、研究会メンバー、日頃よりご教示いただいている以下の方々

に心からお礼申し上げたい。鼎丈太郎、寒川朋枝、中村直子(敬称略・五十音順)

### 注

- (1) 2000年当時、スセン當貝塚土器資料は、概報(上村・本田1984)で報告された最も良好な資料の大部分が行方不明となっていたが、2008年の鹿児島大学考古学研究室の引越し作業に伴い、不明だった遺物が確認された。
- (2) 三宅・藤岡1940による土器の特徴の記載から判断すると、奄美諸島の既存型式には当てはまらず、現状ではスセン當式土器の特徴にほぼ合致しているため、今回、戦前から当該土器が確認されていたとみなし、研究史補遺に加えた。この遺物の所在は分かっていない。
- (3) 図3-43のような口縁部形状を示す無文尖底系土器資料が、沖縄貝塚時代後期前半の大当原式土器前後に存在することが長年の懸案であったが(二段階前の弥生時代前期並行前後にあらわれる阿波連浦下層式土器にも口縁部形状が類似しているため)、同時期に存在する奄美諸島スセン當式土器壺の口縁部形状に鑑みれば(例えば図

2-23～25)、その属性が沖縄諸島で取り入れられているとみなした方が理解しやすい。

#### 文献

- 安里嗣淳・名嘉真武夫 1979『伊江島ナガラ原西貝塚』伊江村教育委員会
- 安里嗣淳ほか 1985『具志原貝塚の概要』沖縄県教育委員会
- 池畑耕一 1984「南西諸島の弥生土器」『鹿児島県・沖縄考古学会合同研究会レジメ』（図版）
- 大城 慧 1980『浜崎貝塚』伊江村教育委員会
- 上村俊雄 1984「徳之島の先史時代」『南日本文化』17、pp.103～114、南日本文化研究所
- 上村俊雄・本田道輝 1984「沖永良部島スセン當貝塚発掘調査概要」『南西諸島の先史時代に於ける考古学的基礎研究』科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書、pp.12～22、鹿児島大学法文学部考古学研究室（『鹿大考古』2に再録）
- 河口貞徳・出口浩・本田道輝 1978「サウチ遺跡」『鹿児島考古』12、pp.1～159、鹿児島県考古学会
- 河口貞徳・本田道輝 1985『中甫洞穴』知名町教育委員会
- 木下尚子 199『南島貝文化の研究－貝の道の考古学－』法政大学出版局
- 金城亀信 1986『東原遺跡ほか発掘調査報告』伊平屋村教育委員会
- 金武正紀ほか 1980『宇堅貝塚・アカジャンガー貝塚』具志川市教育委員会
- 北野勘重郎・森幸一郎 2011「和泊町西原海岸遺跡の調査概要」『奄美考古』6、pp.59～68、奄美考古学会
- 島袋洋ほか 1996『平敷屋トウバル遺跡』沖縄県教育委員会
- 里山友廣 1988『市理原』龍郷町教育委員会
- 里山勇廣ほか 1984『手広遺跡』龍郷町教育委員会・奄美考古学会
- 柴田 亮ほか 2012『考古学研究室報告47：ナガラ原東貝塚8』熊本大学文学部考古学研究室
- 新里充人ほか 2001『考古学研究室報告36：ナガラ原東貝塚3』熊本大学文学部考古学研究室
- 新里貴之 2000「スセン當式土器」『琉球・東アジアの人と文化』上、pp.153～173、高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会
- 新里貴之 2004「沖縄諸島の土器」『考古資料大観12 貝塚後期文化』、pp.203～212、小学館
- 新里貴之 2008「琉球縄文土器後期」小林達夫編『総覧縄文土器』、pp.822～829 総覧縄文土器刊行委員会
- 新里貴之 2009「貝塚後期文化と弥生文化」『弥生文化の輪郭』弥生時代の考古学1、pp.148～164、同成社
- 高梨 修 1998「南島」『鹿児島考古』32、pp.92～95、鹿児島考古学会
- 高梨 修 1999「いわゆる兼久式土器と小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土土器の比較検討」『サンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流－ヤコウガイをめぐる考古学・歴史学－』、pp.19～40、名瀬市教育委員会
- 高梨 修 2003『小湊フワガネク遺跡群』名瀬市教育委員会
- 田里一寿ほか 2005『前原貝塚』宜野座村教育委員会
- 東門賢治ほか 2009『小堀原遺跡』北谷町教育委員会
- 戸崎勝洋・長野真一 1987『先山遺跡』喜界町教育委員会
- 長野真一ほか 1991『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書』Ⅲ 鹿児島県教育委員会
- 中山清美 1983「兼久式土器〔I〕」『南島考古』8、pp.50～51、沖縄考古学会
- 中山清美 2006『マツノト遺跡』笠利町教育委員会
- 中山清美・池畑耕一・牛ノ浜修・西中側駿・山田治・小橋川明 1984『あやまる第2貝塚』笠利町教育委員会
- 西園勝彦 2009『屋鈍遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 宮城伸一・東當美和 2005『津堅貝塚』勝連町教育委員会

第Ⅱ部

- 宮城弘樹 1998「貝塚後期土器の研究（Ⅰ）－部瀬名貝塚出土表裏面有文土器資料に着目して－」『あじまあ』8、pp.41～54、名護市立博物館
- 三宅宗悦・藤岡謙二郎 1940「徳之島出土の貝塚土器に就いて」『考古学』11- 5、pp.235～251、東京考古学会（1996『沖縄県史料』前近代9考古関係資料1、pp.353～368、沖縄県立図書館史料編集室に再録）
- 盛本 勲 1990『東原貝塚』伊平屋村教育委員会
- 盛本 勲ほか 1989『清水貝塚』具志川村教育委員会
- 盛本 勲・比嘉優子 1995『北原貝塚』沖縄県教育委員会
- 山口俊博ほか 1981『与論島の先史時代』熊本大学文学部考古学研究室
- 吉永正史ほか 1984『犬田布貝塚』伊仙町教育委員会
- 米倉秀紀ほか 1983『ケジ遺跡・コピロ遺跡・辺留窪遺跡』熊本大学文学部考古学研究室
- 琉球新報社 2001.3.10付「復元できる形で発掘：スセン當式土器・大堂原貝塚で全国初」
- 若杉あずさほか 1997『考古学研究室報告：用見崎遺跡Ⅳ』熊本大学文学部考古学研究室

図版出典

- 図2 1～19（スセン當貝塚：新里原図）、20（喜念貝塚：三宅・藤岡1940〔1996『沖縄県史料』再録図を再トレース〕）、21（先山遺跡：戸崎・長野1978を再トレース）、22（与路砂丘：新里原図）、23（ウギヤウ遺跡：新里原図）、24～30（西原海岸遺跡：北野・森2011を再トレース）
- 図3 31（小堀原遺跡：東門ほか2009を再トレース）、32・34・40・51～53（前原貝塚：田里・島袋2005を再トレース）、33（浜崎貝塚：大城1980を再トレース）、35～39・43（清水貝塚：盛本ほか1989を再トレース・43は新里原図）、41（ナガラ原西貝塚：安里・名嘉真1979を再トレース）、42（ナガラ原東貝塚：柴田ほか2012：新里原図）、44・54（津堅貝塚：宮城・東當2005を再トレース）、45（松田ヒッピー浜：新里原図）、46～50（平敷屋トウバル遺跡：島袋ほか1996を再トレース）
- 図4 54（万屋泉川遺跡：中山1983を再トレース）、55（マツノト遺跡：中山ほか2006を再トレース）、56（運天サバヤ貝塚：新里原図）